平安時代四天王彫像における図像の展開とその典拠について

慶應義塾大学　川崎 暁

本発表は、平安時代の四天王彫像、特に十世紀の主要作例の形像について検討を行い、持国天の図像が増長天に対応させるために形成されたものであることを指摘し、とりわけ『陀羅尼集経』の改変による展開を重視する瀬山里志氏の説に対して若干の私見を提示するものである。

四天王像は通常須弥壇の四隅に安置され、前列に並ぶ持国天像と増長天像は、特に十世紀以降の作例の多くでは左右対称に近い形像に表わされることが知られている。しかし、その典拠に関しては、従来、胎蔵曼荼羅等の密教図像の影響を指摘された猪川和子氏や、『陀羅尼集経』の改変に基づく展開を想定された瀬山氏の論考が提示されたが、現存する図像や経軌に一致するものが見出されず、充分な検証が果たされているとは言い難い。

図像の検討において重要である身色や持物等の大半は今日後捕に改められているため、明確な標識（宝塔）を持つ多聞天以外の三像は当初の尊名すら確定できないのであるが、同時代の板彫曼荼羅には四天王が彫像とほぼ同じ形体に表されている作例が数点認められ、それらとの比較により右腕を振り上げ開口する像が持国天で、左腕を振り上げて口を結ぶ像が増長天であることが確認できる。この形式の初期の作例と指摘される清凉寺像（寛平八年〈八九六〉頃の作）では、持国天・増長天両像とも口を結んでおり、口の開閉による区別は十世紀以降に行われるようになったものであることがわかる。ところで、持国天と増長天を阿形吽形に区別するのは奈良時代にも行われていることであるが、現存作例の検討から、奈良時代の作例ではそれらが特定の尊格に固有の形像ではないことが認められるのに対して、平安時代では経軌や図像に明確ではない両者の区別を示すための標識として機能していることがわかる。

さらに、前腕部の捻り方や手の握り方から当初の持物を推定することは可能であると思われることから、当初の手先を有する作例について検討すると、増長天像はほぼ一定の形像を示すのに対して、持国天像は振り上げた右手に剣を持つものと三鈷杵等を持つものがあり、一定ではないことが確認できる。これは持国天像の形像が『陀羅尼集経』を反転させた増長天像と一対の像として対応させるために形成されたものであることを推測させる。また、広目天像も右手に羂索ではなく剣を持つ作例が多く、これらの総てを『陀羅尼集経』からの改変と位置付けることには無理があると思われる。

このように、十世紀以降の作例では口の開閉や持物の区別等により図像が固定される傾向が確認できるが、これは瀬谷貴之氏が、方位によって区別されていた四天王像の身色が、十世紀以降、胎蔵曼荼羅の影響により四躯とも赤肉色系に表わされる作例が増加すると指摘した時期とも符合する。身色による区別に代わる新たな四天王各像固有の形像が模索された結果として十世紀における図像の展開を位置付けたい。